

---

# IS ~ 反逆の名を冠するIS ~

田中太郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS（反逆の名を冠するIS）

### 【Nコード】

N4068X

### 【作者名】

田中太郎

### 【あらすじ】

IS（Infinite Stratoss）SS（仮）からタイトル変更しました

二人目？の男性IS操縦者は、イタリアの代表候補生！？

そんな彼が、ISの物語をどう引っかけ回すのかは、作者にもわからない…



## プロローグ（前書き）

ここまで来るといふことは寛大な心の持ち主さんですね？

ホントに駄文ですよ、（「」）（ ）（ ）（ ）  
いいんですよね？

しじじいですがいいですね？

## プロローグ

三月中旬 今日高校入試の日で藍越学園の試験会場で受験生2人が迷っていた

「なんでこんなに分かりにくい造りしてるんだこの建物」

「ていうかいつになったら着くんだシアン？」

「安心しろ一夏 俺の長年の勘と最近の勘がもつすぐ何かやなこと起こると言っている」

「全然安心できない！？てか100パーセント勘じゃねーか！！」

「今日もいっつっこみをありがとう一夏君でことでその扉を開けてみようこの辺りがあやしいと思われる」

「えーお前の勘当てにならないしな……」

「いいからあける一夏」

「はいはい」 ガチャ

ドアを開けるとそこには中世の鎧を思わせる機械があった

「ん？あれってISだよな？」

「ほうよくわかったな一夏のくせにあれは純日本産第二世代型IS打鉄だな」

「へーよくしってるなーって一夏のくせにってなんだよー！」「これ触っていいのか？」

「オイコラムシスンナ」

「さわってみよう」ペタ キイイン

高い金属音の後シアンはISを纏っていた

「……………」

「……………あれ？」

バタバタガチャ ISの起動音を聞いて職員たちが駆けつけてきた

「あー君たちここは関係者以外立ち入りき……ん……し……？」

「あれ？君男だよな？」

「そうですよ」

「なんでIS乗ってるの？」

「さあ？わかりません？」

「うん とりあえずおりてそっちの君も触ってみて」

「……えっ！？ああはいはい」ペタ キイイン

「なんでだろう……なんで乗れるの君たちは？」

「……さあ？わかりません」「」

「……じゃあ上に連絡取ってくるからここでまってね」タッタッタ



## プロローグ（後書き）

ホントに駄文ですいません>m) ( m<

感想とかもらつと感激で泣いちゃいます

次は設定を載せたいと思います

こんな駄文でよろしければ次回も宜しくお願いします

10月12日 改行しました

## 設定1（前書き）

とりあえず設定1まだ増えるかもです

主人公はそこそこ強い？

## 設定 1

藍川シアン 日本人とイタリア人のハーフイタリア国籍

藍色の髪でミディアムぐらいの長さ

身長… 180cmぐらい

体重… 65キロぐらい

容姿… 上の上でほとんど日本人違いは眼の色が青いくらいこれがコンプレックスなのでいつもはカラコンをしている また男女問わず十人が十人振り向く モデルはロスカラのライの髪を藍色にした感じ分からない人はいつか天魔の黒ウサギの鉄大兎の髪の色を藍色にした感じ

性格… 年上には敬意をはらい敬語を使う天然で鈍感

特技… 束に習って少しだけハッキングが出来るだが束と比べてなので一般的に見たらかなりできる趣味でハックすることもある

あと一夏や篝や鈴とは幼馴染あと弾

年上に好かれる

一夏の家とはお隣さん

両親はすでに他界しており唯一の肉親である兄は今現在行方不明

イメージCVは神谷浩史

あと言い忘れていましたが

更新はホントに不定期になると思います

でも行方不明になることはありません

やめる際にはやめますと言いますから) . . . (キリ

次は明日更新できると思います

## 設定1（後書き）

専用機が思いつかない

高機動型の機体にしようとは思っているのですが

武装が：名前もイタリア語にしくちゃいけないし

なにか良い案があったらこの駄目作者に教えてください< m > ( )

m <

10月11日後付け設定増やしました

## 第1話（前書き）

しばらくは一日一話で行けそうです

そして短いです

## 第1話

シアンと一夏は午後8時になってようやく解放された午前8時ごろから約12時間の質問攻めを受けた二人はクタクタだった  
とりあえず家に帰った……………帰ったのだが……………

「あれ？なあシアン俺とお前の家の前にいるあの人たちすげえあやしいぞ!？」

シアン達の家の前には百人ぐらい居るんじゃないかね？つてぐらいの人がいた

「ん？あああれは……………あれは……………だれ？」

「いやしらねーのかよ」

こんなやり取りをしていたら誰かが二人の存在に気がついた

「ん？…あれだ！おいついたぞあつちだ!！」

ダダダダダダダダダ

二人の方に雪崩のように人が流れ込む

「うおおわああああああああああああ」

ヒュン ドガン 当然何かが見れて人を吹き飛ばした

「……………ぶぎゃ……………」

「……………ふうやれやれ外が騒がしいから見に来ればお前達か」

誰かと思ったら……

男より男らしい漢の中の漢メンオブメンズ織斑千冬さんだった

「千冬さん（姉）！？」「

「あれ帰ってたんですか？」

「私の家だ帰ってきてもいいだろう」

「そうですねああそうそうさっきはありがとうございますとございます助けてくれて」と微笑する

「こうかはばつぐんだ！」

チフリーは10000のダメージを受けた

「~~~~~ノノノべつ別に助けたわけではない騒がしかったから駆除しただけだノノ」

「そんなんですかでもまあ助けてもらった事には変わりはありませんにかお礼を…そうだ今度一緒に買い物でも？なにかおごりませよ」

「そっそつだなでは今度の休みにでも……」

「そのときは一夏も行くよな？」

「……………」

「…どうした？固まって……」

「「はああ」

「??????」

こうして夜は過ぎて行った

## 第1話（後書き）

ヒロインは千冬さんに決定しました（＾Ｏ＾）／

シアンが鈍感ってことにしました 後付けで済みません（<―>）  
どうでもいいですが

タイトルは未定なのでよかったら考えてください>m（――）<m<

専用機の名前と武装と武装の名前も募集してます

10月12日 改行

## 第2話（前書き）

主人公の専用機のアイデアまだ募集してます

あとなにかネタ等ありましたら教えてください> m ( | ( m <

実は火曜日からテストなのにバイトと小説しかやってないorz

## 第2話

シアンたちがISを動かした翌朝

またしても玄関に人だかりができていた

「（これじゃあ郵便受けに行けないな…しかたない）」

寝癖を直し着替えて外に出て行った

ガチャ ドアを開けた瞬間カメラが一齐にシアンへ向いた

「あーみなさんこれ以上うちのまわりをうるついたら警察呼びますよ?」

「……………（だまれ糞がき）」

「わかりましたー社だけインタビューを受けましょう」

「……………ほんとですか!？」

「あーでもさつき黙れ糞がきとか思った方のインタビューは受けませんついでに警察呼びます」

「……………」

「おやあ?みなさん糞がきとか思ったんですかあ」

これ以上ないくらいの黒い笑みを浮かべながらケータイを取り出し

110と押しかけた時

「「「「「すいませんでしたっ！！！！」「」「」

約百人のジャンピング土下座&すいませんでしたの大合唱

これに満足したかのように気を付けてくださいねえーと言い残しシアンは部屋に帰って行った

この場にいた約百人の気持ちは見事に一致した

藍川シアン…おそろしい子っ！

一方一夏は約百人の話を適当にあしらいながらも聞いていたようや  
く終わりが見えてきたところに  
シアンのところをあきらめた百人が来て一夏は死にそうな顔をして  
いた

ちなみにシアンはそれを上から見ていた  
そして

「一夏ザマアww」  
と思っただのは秘密だ

## 第2話（後書き）

毎度毎度短いです

春休み編はこのぐらいの長さにしようと思います

ちなみに箒と鈴は友人ですあとついででも弾も

感想待ってます

## 設定2 機体設定(前書き)

アル様 e r u様の意見を参考にしましたありがとうございます

## 設定2 機体設定

### 主人公機

イタリア製第三世代型IS「テンペストデリベリオン」  
大型ウイングスラクター4機が付いており高機動戦闘を得意とする  
スピードは現存するISの中でトップクラス  
待機状態はリング

### 名前の由来

テンペストデリベリオン（以下リベリオン）はイタリアの主力機  
テンペスト？型の派生形で  
テンペスト？型は本来砲撃重視のパワータイプだったがリベリオン  
はスピードに特化した機体で  
従来のテンペスト？型とは全く逆のコンセプトで開発された事から  
反逆の名を冠する  
テンペストになった（テンペスト？型がパワータイプなのはオリ設定です）

### 武装

ジャッジメント  
断罪者：グリップから銃身の手前まではリボルバー、銃身はオート  
マッチックという変わった銃の形状をした武装。DグレのクロスII  
マリ안의武器、威力が非常に高く連射が可能  
その弾丸は軌道を外されてもロックしたターゲットを追い続ける。  
この時イメージインターフェイスを利用する第三世代兵器。Dグレ  
を読み直していいなあと思ったので… あ！という構造な  
のか？

や物理現象とかはもう無視してください。六発撃ったらリロード

が必要 一発ごとにS・Eを20くらい消費する 半分くらいwiki参照

アイザイアン・ボーン・ガン…サーマルガン…電磁誘導ではなく入力された電流のジュール熱にて弾体後方の導体をプラズマへ相変化させ、これに伴う急激な体積の増加を利用するもの。瞬間的なプラズマ化に伴う爆発を利用するため、比較的低いエネルギー量でも一定速度未満であれば高い初速が得易い代わりに、プラズマ膨張速度を超えた初速を得ることはできない wiki参照

どついたぬき  
同田貫…近接ブレード 子連れ狼の主人公の愛刀と同じ名前 漢字なのはブレードの開発者が「漢字ってかっこよくね？」という鶴の一声で決まった

バイルバンカー…漢のロマンとつき電磁誘導型

唯一仕様の特殊才能…「コンオファビリティ」コントロールロ・コンスーモ  
自身のこれを発動すると、5分間だけSEの消費を1/2に抑えることができる。

最後に機体カラーは紫で関節部分は赤です

## 設定2 機体設定（後書き）

今日中にもう一回更新できるかもしれません

タイトルは仮なので良いのがあったら教えてください  
ネタ等も待っています

感想まっています

10月11日改稿<sup>ほぼバクリ</sup>

10月12日さらに改稿

エタニティーボールは使いづらいたので削除しました

多分まだ変わります

### 第3話（前書き）

今回は3話と4話の二部構成です

ほんとgdgdなので読まなくてもいいです  
いやむしろ読まない方がいいかも…

### 第3話

ある日シアンにイタリアから電話がかかってきた  
なんとも専用機を作りたいからイタリアに来てほしいそうだ  
しかも旅費は向こう持ちだから無償  
ただでイタリアに行けるとシアンははしゃいでいた

「やあー夏!」

「おうシアンどうした今日はテンションが高いな」

「お?わかるか?今日イタリアから電話があつてな専用機を作りたいからイタリアに来てほしいんだとさしかも旅費は向こう持ちこんなにいいことはない」

「へえいいなーお土産頼むぜ」

「おうわかった」

「絶対だからな」

「わかつてるって」

そして当日

シアンは家の前で迎えを来るのを待っていた  
3分後金持ちが乗るようなりムジンが来た

「……………まじか」

「マジです時間がありません早く乗ってください」

30分車で移動したのち飛行機で数時間かけて…

「やってきましたイタリアイエエイ」

「……………」

「……………（スルー）」

「行きますよおいてきますよ」

「すみません（誰のせいだよ）」

そしてリムジンで小一時間やってきたのは…

「どっどっどっ？」

「イタリア首相のお屋敷です」

「…まじでか」

「粗相のないように」

「では案内しますこちらになります」

無駄に長い廊下を進み

「ここで首相がお待ちになっておりますのでお入りくださいもう一度申し上げますが粗相のないように」

「はい…」

ギイドアを開けると

クル 椅子を回転させて初老の男が確認できた

「やあ君がシアン君だね？よくきたね疲れただろう？おいお茶をお出ししてくれ」「はいただいま」

ああシアン君そこにかけてくれたまえ」

「は、はあ失礼します」

「そんなにかしこまらないでくれたまえ」

「え！？いやしかし…」

「堅苦しいのはにがてなのでな」

「はいわかりましたですがすぐには…」

「うむまあすぐなれるだろう」

「さてと本題に入ろうか今回来てもらった理由は専用機を作るためだったね？

でも君の専用機もうほとんど完成してるんだよ」

「！？（ぼけたかこのおっさん？）」

「おどろいたかね？」

「ええまあ」

「ハハハまあ仕方ないだろう  
今回君に来てもらったホントの理由は君にイタリアをよく知って  
もらうためののだよ

よく知らない国のISに乗るのもいまいちだろう？

だからこのイタリアをよく知ってほしい

まあこんな理由じゃあ経費を下せないからね建前を用意したのだよ  
まあ一応一度研究所の方にも顔を出しておいてくれながながとすま  
んな

今日はもう休んでくれそと車と私の部下とs pのものをまたせてい  
るその者たちと一緒にホテルへ行ってくれああ明日もその者たちと  
一緒にイタリアをまわってくれ」

「わかりましたいろいろとよくしていただきありがとうございます」

「うむではな」

「はい失礼します」

ガイドアを開けたまた長い廊下を進んで部下の人たちとs pの人と一  
緒にホテルへ行った  
いろいろ疲れていたシアンはすぐにねた

イタリア旅行一日目 fine

### 第3話（後書き）

もうなにがしたいのかわからないうえggggggですねはい

イタリア旅行編は飛ばしてもいい気がします

一応感想待ってます

タイトル募集中です

## 第4話（前書き）

2部構成とか言いながら3部構成になりそうです

ちなみに専用機のお披露目は少しだけです

## 第4話

次の日シアンたちがリムジンで研究所へ行くと  
某プリン伯爵のような人が出迎えた

「いらつしゃい国立IS研究機関藍川シアン専用機開発部門へようこそ」

「ささじゃあとりあえずデータ取るからシュミレーターにでも乗って」

「は、はあ（よくわからない人だな）」

「ああそつだシュミレーターには君の専用機がロードされてるからね」

「え!?!」

「じゃあ始めるよとりあえず初級編つと」

ポチ 地獄のシュミレーターが始まった…

ジュピ

「武装の確認はできる?」

「あ!はい

」

「うんじゃあ敵を出すから適当に倒してみて」

ヒュン ラファールを纏った敵が出てきた

「じゃあまずは断罪者ジャッジメントを使ってみて」

「えーと…これか」

武器一覧から断罪者ジャッジメントを選ぶとグリップから銃身の手前まではリボルバー、銃身はオートマチックという変わった銃が出てきた。

「??（すごい形状だな。）」

「とりあえず打ってみて」  
「言われた通りに打ってみる」

ズガン バス 敵に命中するとかかなりSEが削られたようだった。

「うん音速で飛んでるからね威力はすごく高いよ」

こんな感じにシュミレーターを行っていった…時間も忘れて…  
終わったのは夜の9時だった。

「うん良いデータとれた」

「また来るときは行ってね？シュミレーター準備しとくから。」

「じゃあ、次は最後にブリュンヒルデが出てくるような設定にしないでくださいな。」

「はいはいじゃあまたね」

「（ほんとにわかったのか？）ではまた。」  
疲れていたのかホテルにいたらすぐに寝てしまったシアンでした  
イタリア旅行2日目 fine

## 第4話（後書き）

専用機少しだけお披露目

本格的なお披露目は原作突入後になると思います

今日はもう一回更新します

## 第5話（前書き）

これでイタリア旅行編は終わりです

もうすぐ原作突入します

## 第5話

地獄のシュミレーターを行った次の日

シアンは部下の人たちに勧められたボールでピザを頼んだ  
チーズの香ばしい香りと共にピザが運ばれてきた

「（今緑色の髪をした魔女を思い出した気がする…）」  
そんな事を考えながら8分割して一切れとり口に運んだときパァン  
どうやら下っ端のマフィアが銃を誤射した

「じゅ銃声!?!」

銃声のおかげでシアンはピザを落としてしまったピザを食い損ねた  
シアンは

「オイピザオチチマッタジャーカアアアア!?!」

下っ端のマフィアをフルボッコにしていた  
そしたら騒ぎを聞きつけたマフィアの上の方の人たちが出てきた

「てめえ家の者になにしとんじゃあ（イタリア語でしゃべってます）」

「

「氏ねやゴリア（イタリア語でry）」

数十人が一斉にシアンへ襲いかかったしかしドゴーン  
立っていたのはシアンだけだった

そのときのシアンの一言

「食べ物への恨み思い知ったか三下ども」

今回のこの一件でシアンは一気にイタリアの裏社会で有名になった  
次にトレヴィーの泉に向かったシアン一向

背を向けてコインを投げておいた

ちなみに2回投げると恋がかなうや3回投げるとその恋が終わるおまじない？があるそうです

その後コロッセオで写真を撮ったりサン・ピエトロ大聖堂でブロンズ为天蓋を見たりして

イタリア旅行3日目は終わった4日目5日目(最終日)とイタリアを巡って旅をして最終日の夜

(展開が急に早くなったのは気のせいです)

ホテルにて

「(明日には日本に帰るのか…楽しかったなイタリアもうちょっと居たかったな

あ！でも次は夏に来てくれてって言われてるか…一人だけならだれか連れてきてもいいって言ってたな…一夏でも連れてくか)」

こんなことを考えていたらシアンはいつのまにか寝ていた

次の日の朝早くの便で日本へ帰った成 空港に着くと行きと同じようにリムジンで帰った

家に着いてシアンは思い出した

「…あ！お土産買うのわすれた…」 イタリア旅行編…fine

## 第5話（後書き）

ようやく終わりました

次で春休み編は終わらせて原作突入したいと思います

感想待っています

## 第6話(前書き)

3連休が終わってしまふ

しかも明日からテストどうしましょ

とりあえず更新しましょう

## 第6話

シアンがイタリアから帰ってきた次の日  
IS学園入学が翌日と迫ってきていた

「明日からIS学園かあ…はあ…鬱だ」

「何言ってるんだよシアンすぐなれるって」

「一夏そのセリフ覚えとけよ」

「ああいいぜ」

「いったなよしじゃあなれなかったらなんかおごれよ」

「おうじゃあ慣れたらなにかおごってもらうぜ」

「おう」

「あ！そうえば今日千冬姉帰って来るってよ」

「へえじゃあ今日で春休み最後だし3人で飯でもいくか？」

「おうそうするか（うーんでも千冬姉にとって俺邪魔じゃないのか？まあいいか）」

夕方17時頃…

「ただいま一夏いるか？」

「おかえり千冬姉」

「あ！おかえりなさい千冬さん」

「なっなんでシアンがいるんだ？（まさか私を待っていたのか？いやそれはないか）」

「千冬さんを待ってたんですよ」

「（は？今こいつは何て言った？）すまんもう一度言ってくれ」

「千冬さんを待っていたんですよさあ行きますよ」

「ど、どこにいくんだ？」

「ああ春休み最後だし夕食に行こうって話に一夏となったんですよあ？」「ああ」

「そ、そうか」

「じゃあ行きますか」

そして3人はあるいて10分ほどで着くイタリア料理店に来た前菜が出てきたところで一夏が

「あ！そういえばシアンイタリアのお土産はどうした？」

「……………（…）」

「まさかとは思いが忘れてたとかそうじゃないよな？」

「も、もちろんあるぞ（汗）」

「じゃあ早く出せ」

「おうわかったじゃあ今からイタリア旅行の土産（これ重要）話でもするかな（・・）キリ」

「そんな事だろうと思ったわ！」

「んんっ盛り上がってるところ悪いがイタリア旅行とはどういうことだシアン？私は聞いた覚えがないが…」  
千冬さんの後ろには運慶もびっくり阿修羅像があった

「あ、あれ？い、い、いつていませんでしたっけ？（滝汗）」

「ああ聞いていないなそんなこと微塵も」後ろの阿修羅がさらに増える

「す、すいませんでしたっ！」

「お、お詫びに次イタリア行く時一緒に行きますか？（これでどうだ？）」

「あ、ああそうしよう次はいつ行くんだ？」と阿修羅が消えていく

「（よかったそんなにイタリア行きたかったんだな…うん）えゝ次は夏休みです」

「あ！でも予算の都合上ー夏は来れないんですがいいですか？」

「なっじゃあお前と二人きりになるんだな？」

「ええいやですか？」

「い、いやかまわない（二人きりか…／＼）」

そして3人はイタリアンを食べて家に帰った

「じゃあ一夏明日からIS学園だな？」

「そっだなじゃあまた明日ノシ」

「おう明日ノシ」

そして明日驚愕の事実を知ることになる

春休み編：fine

## 第6話（後書き）

春休み編はこれで終了です

休みの日は必ず更新します

明日からとてつもなく忙しいので更新遅いかも

**お知らせ（前書き）**

お知らせです

## お知らせ

読みやすくするための意見や機体設定に無理があるなどの意見をいただいたので

これからはそれらに気を付けてやりますのでこれからもこの小説をよろしく願います

具体的には

一話ごとの文字数を増やす

読みやすくするために行間を空ける

漢字変換

情景描写

登場人物の心情描写などを次の更新から気をつけます

機体設定変えました

アドバイス等待着っています

これからは更新が週1になるかもしれませんが  
慣れたらまた毎日更新します

とりあえず次の更新は明日以降です

お知らせ（後書き）

機体設定かえました

## 第7話（前書き）

テストが終わったので書きました。

指摘された点を意識して書いたつもりですが、まだ読みにくいと思います。

相変わらずの駄文です。

## 第7話

4月上旬 朝 IS学園校門前にて2人の男子生徒がいた。

「…（無駄にでかいな。校門。それにしても回りの人が一夏以外全員女子って…」

噂とか一瞬で流れるんだよな多分…こわ）」

「…（シアンのやつ緊張してるのか？…まあ良いや。そういえば今日って何曜日だった？」

各人思い思いのことを思っていた。

そして門をくぐって受付をすまし、講堂へ移動し入学式

必ず同じこと3回は言うので有名な学園長のありがたーいお話をうたたねしながら

聞き流していたら、いつのまにか入学式は終わっていた。

今度は、教室に移動しSHRの時間…

「みなさんいますねー？いない人は手を上げてください……………」  
「いませんね

では、SHRを始めます。」

「（ん？今のギャグか？いや、素でやってるんだろっとな。）」

「あ！その前に私の自己紹介します。

私は、このクラスの副担任の山田 真耶です。

1年間宜しく願います。」

そしてにこりとほほ笑むが、クラスの反応はない。教室に微妙な空気が流れる

「（どうすんだよ、この空気先生もう涙目だよ）」  
シアンは、一夏に助けてあげてという視線を送るが、無理だと返された

「グス…じゃじゃあとりあえず自己紹介お願いします。1番から。」

「（1番って俺か…よし）」

「えーと（うつ…視線が）あ、藍川シアンです。  
趣味は、ハッキング？と読書です。気軽に話しかけてください。  
1年間よろしく願います。」と微笑むするとクラスの人ほぼ全員がほほを赤くした。

「??（みんな顔が赤いぞどうしたんだ？）」  
安心のシアंकオリティーがあった

「（まあ、いつか。お！次は一夏だな。）」

「織斑君…？織斑君、………織斑君、織斑君……、織斑君」  
山田先生が、何度も呼びかけているのに一夏の反応はない。  
先生またもや涙目になっていた。

「（やるな、一夏）」  
感心しているシアンがいた

「おりグスむらくん…グスおりむグスらくん」  
もはや涙目ではなく先生は半泣きだ

「…ん？は、はい！」

一夏はよづやく呼ばれていることに気付いた。

「あっごめんね？自己紹介なんだけど、次織斑君の番何だよね自己紹介してくれるかな？駄目かな？」

ホントにこの人は年上なのだろうか？とクラス全員がそう思った。

「先生、そんなに謝らなくてもちゃんと自己紹介ぐらいしますから」

「ホントですか？絶対ですよ。約束ですよ。」

そして、一夏は立って後ろに振り向く

「（うっ、この視線はきついな…）」

「えー…えつと…織斑一夏です。よろしくお願いします。」と一礼

「（…なんだこの『え？もうおわり？』的な空気。それとシアン、そんな憐れむような目で見えるな！）」

「……………」

一夏のせいで、教室の空気は最低だ

「（まずい、このままでは暗い奴のレッテルを貼られてしまう…）」  
そして、深呼吸をして『お、来るか』的な空気になってから

「以上です（…キリ）」

ガタタタ、思わずクラスの一部分がずっこけた。シアンは笑いをこらえるのに必死だ。

「…つぶく（やべ、腹筋崩壊しそう…）」

一夏は

「えー!?あれ?駄目でした?あとシアン笑うな。」

パアアン

「いつー!?!」

おそろおそろ振り向くとそこには、

黒のスーツにタイトスカートすらりとした長身、よく鍛えているが  
けて過肉厚ではないボディライン、組んだ腕、鋭い釣り目そし  
て手には *syusseki*bo という名の兵器があった。

「(まちがいない)げえ、平和島静雄!?!」  
パアアン

「誰が池袋最強だ。馬鹿者が。」  
ずっと笑いを堪えていたシアンも気付いた。

「あ!千冬さんなんでこんなところに?」  
ポストとかわいい音がする

「ここでは、織斑先生と呼べシア:藍川。私はここの教師だからな。」

「そうだったんですか。」

「ちょっとまで、千冬姉俺の時と *syusseki*bo の威力がち  
がー」ズバアアン!今日一番の良い音が鳴った。あまりの音の大き  
さにクラスの人半分くらいは引いていた。

「ここでは、織斑先生と呼べ絶対だ!ああそれと威力については、

気のせいだ。」

「え！？いやでも明らか……」ズバアン

「気のせいだ！」

「……はい（ちくしょう、こうして善良な市民は暴力に屈していくんだ。）」

「あ、あの織斑先生会議はも終わられたんですか？」  
空気になっていた山田先生が口を開いた

「ああ、山田君クラスへのあいさつを押しつけてしまってますまなかつた。」

「い、いえ副担任ですのでこれくらいいしないと……」

山田先生は若干熱っぽい目で千冬さんを見る

そして千冬さんがあいさつする

「諸君、私が織斑千冬だ。」

君たち新人を一年で使い物になるようにするのが私の仕事だ。

私の言うことはよく聞きよく理解しろ、出来ないものには出来るようになるまで指導してやる。

私に逆らってもらってもいいが、言うことは聞け！いいな？」

「……な、なんて暴力的発言。教師とは思えない……」

二人の思考は見事にシンクロした。

この後黄色い歓声が上がりをさかった。SHRは終わった。

「「あー……………」」

一時間目が終わり（展開が急なのは気のせい）休憩時間シアンと一夏は、話していた。

「なあ、一夏？これ覚えてるか？」

どこからかボイスレコーダーを取り出して再生ボタンを押した。

~~~~~

「明日からIS学園かあ…はあ…鬱だ」

「何言ってるんだよシアンすぐなれるって」

「一夏そのセリフ覚えとけよ」

「ああいいぜ」

「いったなよしじゃあなれなかったらなんかおこれよ」

「おっじゃあ慣れたらなにかおこってもらっぜ」

「おっ」

（第3話参照）

「……………」一夏の眼からはハイライトが消えていた。

「…一夏？」シアンは笑みを浮かべ、一夏に詰め寄る。これは結構怖い

「わ、わかったよ、何かおごればいんだろっ？」

半分自棄になつて言う。

「それでいいんだぞ一夏。じゃあ、ハーゲンダツ 1ダースな」とorz状態の一夏の肩をぽんぽんと叩く。

「相変わらずだな」と不意に二人の後ろで声がした。

「「え!?!」「まさか話しかけられるとは思わなかった二人は、驚いて声が裏返ってしまった。」

そして、声の方を見るとそこには、小学生の時に引越した篠ノ之箒がいた。

「「箒さん」「

「ああ、久しぶりだな。シアン、一夏。ここだと話しづらい、屋上へ行かないか？」

そつだなと言つて一夏はシアンを連れていこうとする。

「い、いや俺はいいわ。やることあるし…二人きりでどうぞ。」

「ん？そうかわかった。じゃあ、行くか？幕。」  
と教室を出て行った。

教室で一人になったシアンは一人で視線攻撃を受けていた。

「早く、慣れたい…」と切実に思っていた。

休憩時間終了1分前次の授業は千冬さんが見ている授業なのに、二人はまだ帰ってこない。

キーンコーンカーンコーン チャイムは無慈悲だ。

「（あちゃ、間に合わなかったな。乙。）」

結局授業開始5分後に現れた二人は、千冬さんの出席簿エクスカリパーアタックの餌食になっていた。

第7話：fine

## 第7話（後書き）

過去最長記録更新

これからは、このくらいの長さにします。途中で挫折するかも知れませんが…

とても、進みが遅いのはなかなか8巻が出ないので進みは駄目かな  
と  
思  
っ  
て  
の  
で  
…

これからもよろしく願います。

## 番外編 1 (前書き)

メモリみたら、なんかこのデータがあったので載せます。

いつ書いたんだっけ……こわっ

## 番外編 1

「はあぁ…どうしてこうなったのだろうか…」

西池袋公園のベンチにて、リストラされたサラリーマンの様な雰囲気醸し出している千冬さんがいた。

少し時をさかのぼってみる。

今日は土曜日、学園の仕事はない。だからいつもの様に学園の私の部屋でビールを飲んで過ごしていた。  
だんだんと眠くなってきたので、寝た。

そう寝たのだ。そして起きたらいつの間にか公園のベンチにいた。

何故？酔っぱらったのか？いや、酔っぱらって池袋まで来るのはおかしい。距離がありすぎる。

じゃあ何故？連れ去られた？いや、それなら気付くはずだ。それに、IS学園にいたのだ。セキュリティは万全。

となると何故だ？じゃあ異世界に来てしまった？一番非現実的だが、束ならやりかねない…

というところでここは異世界だと結論づけた千冬さんは、やはり酔い

が回っているのだろう。

とりあえず、散策してみるかと言って公園を出た。

公園を出るとそこは、カオスだった。

飛び交う標識、ゴミ箱、自動販売機、大量の人の着信音が同時なったり、目が赤く自我を失い刃物を振り回す人々、高笑いしながらケ―タイを踏みつぶす人や

自動販売機を人に向かって投げる人 それらもうおそろしかった。

「……どこだここは？地獄かhellなのか？」そう考えてしまう千冬さんは、おかしくないだろう。

そんなことを考えていたら、黒いバイクが大量の白バイに追われていた。

もうほんとにカオスだった。

千冬さんは言った。

よしこの地獄を楽しもう。フッフ、ブリュンヒルデをなめるなよ！  
！！！！！！

「という夢を見たんだが、どう思うシアン？」

「いや、しりませんよ。」

**番外編 1 (後書き)**

よくわかりませんね。

次は本編です

## 第8話（前書き）

進まない。話が進まない。

## 第8話

二時間目 1年1組の教室にてある男子は青ざめていた。

目の前には分厚い教科書が何冊かある。

一番上の教科書を取って見るが、専門用語のオンパレードで一夏はグロッキーだった。

一方シアンは、イタリアでプリン伯爵に多少ISの事について聞いていたのではつきりいって余裕だった。

「(うう…シアンのやつあんなすました顔してるってことはわかってるんだよな?この専門用語)」

「(…さつきから何なんだ?一夏は?そわそわして…まさか分からないとか?)

いや、さすがの一夏でもこのくらいはね…」

一夏はずっとそわそわしていたので、先生も気になり声をかけた。

「織斑君、何かわからないところでもあるんですか?」

「あ、ああえーと(どこだっけ?つとと全部だった)」

「わからないところがあつたら聞いてくださいね。私は、先生ですから。」

「(おおいつもは頼りない先生が何故か頼もしいぞ…よし)先生!」

「はい、織斑君!」

「ほとんど全部わかりません）、・・（キリ）」

「（一夏あ…よく言い切った。お前男だよ（笑）」  
シアンは笑いをこらえるのに必死だ

「え、全部ですか？」  
さすがの先生も困っている

「えーと…織斑君以外に今のところ全部わからない人はいますか？」  
先生は拳手を促すが誰も手を上げない

「…織斑、入学前の参考書は読んだか？」  
今度は千冬さんが聞く

「（…参考書：あ！あのタウンージか！）…え！？そんなものも、  
もらってませんよ」  
と必死に嘘をつくが

「嘘をつくな、馬鹿者が」  
エクスカリパー スパーン  
出席簿の餌食になった。

「どうせ古い電話帳と間違えて捨てたのだろう？再発行してやるから、1週間ですべて覚える。」

「あの分厚いのを1週間では無理じゃ…」

「やれと言っている。」  
ギロリ

「はい…」

そして千冬さんはシアンの方を向いて

「藍川は、理解できているか？」

「はい、概ね」

「そうかじゃあ織斑に教えてやってくれないか？」

「いいですよ。」

「すまないな。」

「…（やっぱ千冬姉はシアンには優しいんだよな…不平等だ！」スパーン

エクスカリパー  
何故か出席簿が一夏の頭に振り下ろされた。

「今、不平等だと思っただろう。」

「申し訳ありません。（なんでわかるんだよ）」

「わかればいい。では、山田先生授業の続きを」

「は、はいでは教科書の…」

2時間目の授業後の放課シアンが一夏にISについて簡単なことを教えていたら…

「ちょっと、よろしくて。」

「……………」（無視だ無視、聞こえない聞こえない）

「二人は無視を決め込む」

「聞いていますの？お返事は？」

「……………」

「（何なんですの？この人たちは！？）無視しないでくださいまし。」

「……………」

シアンたちは尚も無視を続ける

「無視しないでくださいまし。」

だんだん涙目になってきた。ついに無視できなくなった一夏が返事をしてしまった。

「わるいな、聞いてなかった。何か用か？えーとセルティさん？（確かこんな名前だった）」

「セシリアですわ、わたくしは首なしライダーじゃありませんわ。」

「すまないな、セットンさん。」

「だから、首なしライダーじゃありませんわ。」

「おおすまんすまん。デュラハンだったな。」

「いい加減にしなさい！全く日本の男性とはこれほど無礼でバカそうな方なのかしら。」

最後の方の言葉を聞いたシアンが

「おい、日本の男の栄誉のために言っておくが、バカなのは一夏だけだぞ。」

「ひどいな！お前。」

「いや、事実だろ。」

「はあ？お前も似たようなものだろう？」

「お前と一緒にするな。俺は参考書をタウンペーと間違えて捨てたりはしないぞ。」

「うっ」

と口論？が始まったセシリアを空気にして…「空気じゃありませんわ」

「わたくしを無視しないでくださいましー！」  
キーンこーんカーンコーン。チャイムが鳴った

「くっ…後でまた来ますわ。」

「（あ！まだいたんだ）」

3時間目の授業は千冬さんの授業だった。

「では、授業を始める。っとその前にクラス対抗戦の代表を決めな  
いと。クラス代表戦の代表は…まあそのまんまの意味だ」

「（クラス代表？面倒だ絶対やらないぞ。あらこれフラグかしら？まあこういうのは、一夏に押し付けて…）」

「自薦他薦は問わない。ただし推薦された者には拒否権はないからな。」

「はい 藍川君を推薦します」

「わたしもあ、藍川君に」

「じゃあ私も」

「（このままではまずいぞ）じゃ、じゃあ俺は織斑一夏君を推薦します。彼は、すごく強いですよ。そりゃあもうISを生身で倒すくらいに。」

「なっ！俺を巻き込むな。シアン。」

「何を言っているんだね？一夏君？私は単純に君がクラス代表に適任だから推薦したただけだよ。」

「嘘つけ！じゃあなんで生身でIS倒せるなんて嘘つくんだ？」

「…（…）」

「はあ…もういいや…おれg…」俺がやると言いかけた時 バアンと机をたたく音がした

「納得できませんわ。男がクラス代表なんて良い恥さらしですわ。」

(中略) 大体文化としても後進的な国で暮らすこと自体耐えがたい苦痛で…」

「イギリスだって日本と大して変わらないだろ？」と一夏は切れたよく見たら、千冬さんも若干イラついている

「(千冬さんもイラついているし…終わったなセットン)ご愁傷様セットンさん。」

「セシリアですわ！もうあなたたちそんなにわたくしを怒らしたいのですか？」

「怒っても指して怖くなさそうだな一夏」

「そうだなww」

「聞こえてますわよ…あなた達ねえ…決闘ですわ！」

「おついいぜ楽しそうだ。」

「がんばれよ一夏。」

「あなたもですわよ！」

「え！俺も(なぜ? why?) I dont know what you men.(直訳)私はあなたが言っている意味がわかりません。かいつまんで言うと、は？何言ってるの？意味わからんしー」

ぶちセシリアの中の何かが切れたが何故か冷静だった

「…もういいですわ…今日はもう疲れました。とにかくあなたも決闘ですわよ。」

「よし話は決まったな。じゃあ来週の月曜日第三アリーナにて、決闘を行う。では授業を始めよう」

三時間目が始まった

## 第8話（後書き）

切り悪いけどここまでで切ります。

もう打つの疲れました。

更新は、土日に1〜2回長めのを

平日の中に2〜3回短めのを更新したいと思います。

## 第9話（前書き）

今回も駄文ですが宜しくお願いします。

## 第9話

3時間目が終わり、放課後教室にて一夏とシアンがいた。

「うう、全然わからん……」

一夏は、グロッキーになっていた。

「これくらい、すぐわかるって（わからなかったら……どうしようかな？）」

と心の中で黒い笑みを浮かべる。

こんなやり取りをしていたら、

「ああ、藍川君に織斑君まだ教室にいたんですね。よかったです。」  
と山田先生がやってきた。

「どうしたんですか？先生」とシアン

「えっとですね、お二人の寮の部屋が決まりました。」  
そう言っって部屋番号の書かれた紙と、キーを渡した。

「決まるのは、もっと先だと聞いていましたが？」とシアン  
すると山田先生は、政府のの特命ですと回りに居る生徒に聞こえないように耳打ちする。

「そういうことですか。分かりました。」

「で、どっちが俺のですか？」今度は一夏が

「1025室が、織斑君です。」

「分かりました。」

と一夏はシアンからキーを受け取る。

「ところで、俺たちが相部屋じゃないということは、個室なんですか？

IS学園って気前いいですね？」とシアンは、自分の推測を口にする。

「あ！いえ、違いますよ。でも安心してください。1カ月で部屋の調整をつけますから。」

「じゃあ、それまで女子と相部屋なんですか？」

「そういうことになりますね。」

「（いや、それっていいのか？）」とシアンは思ったが、口には出さない。なぜなら

本能的に言ったらめんどくさいことになると感じたからだ。

「ああ、でも一度帰らないと荷物が…」一夏が、思い出したように言うが違う声に遮られる。

「それなら問題ない。二人の分私が用意してやった。まあ、生活必需品だけだな。着替えと携帯の充電器があれば十分だろう。」

「あ、ありがとうございます。」

「（大雑把すぎる…まあ千冬姉らしいけど、人の生活には潤いも必要だと思えますよ）」と一夏は思ったが、言ったらどうせ織斑千冬専用打撃武器：syussekiiboの餌食になるのは目に見えている。

「（まあ、何時もパソコン持ち歩いてるし、パソコンあれば問題ないかな？あ！でもここちゃんと回線繋がってるのか？）」

「では、時間を見て部屋に行ってくださいね。各部屋にシャワーがあります、大浴場も学年ごとに時間が違いますがあります。でもお二人はいま使えません。」

「え？なんでですか？」

「バカかお前は、同年代と女子と一緒に風呂に入りたいのか？」と千冬さんが聞く

「あー…（そうだった。）」

そんなことを言ったら山田先生が暴走してしまう。

「え！織斑君女の子と一緒に風呂に入りたいんですか？だめですよ。」

「い、いや入りたくないです。」

「え！女の子に興味ないんですか？それもそれで問題のような…」案の定暴走した。そして、聞き耳を立てていた女子に聞こえてしまった。

「織斑君男の子にしか興味ないのかしら？」

「シアン×一夏…じゅる…」

「ハアハア…」

と腐女子が騒ぎ出した。

「（あーあ一夏のせいで…）」

「じゃ、じゃあ私たちは会議があるので…寄り道しないで帰るんですよ。」

「ああ、その事なんだが藍川は私と一緒に来てくれ。」と千冬さんがシアンの呼び出し。

「「「????」「三人は頭に????を浮かべる。」

「イタリアから藍川の専用機が届いている。フォーマーケット初期化と最適化処理フィッティングを行う。」

「あ！そうでしたね。忘れてました。じゃあ織斑君だけ帰ってください。」

いや、そんな大事なことを忘れるなよというつつこみは置いて…

場所は変わって第3アリーナ西側ピット…

紫のカラーリングに関節部分は赤の機体に乗ったシアンがいた。

そして、『初期化と最適化処理が終了しました』とISからメッセージがあつた。

「よし、終わったな。では、これから模擬戦を行つてもらつ。」

「（は？実機に乗つたの今日でまだ2回目だぞ？いきなり実践？）な、なにを言つてるのですか？千冬さん？」

ポン相変わらず優しい音を立てて  
「織斑先生だ。」と優しい声で言う。

「まあ、聞くより慣れた。行け、シアン。危なくなったら助けてやるから。」

「（それじゃあ、俺の対戦相手が危ないのでは？…まあいつかはい、じゃあ行つてきます。」

「ああ、気をつけるんだぞ。」

そうして、ピットを飛び出した。

そして、その先で待っていたのは、

「やあ、待っていたよ。藍川 シアン君」  
水色の髪をして水を纏  
ったISを装備している人だった。

## 第9話（後書き）

はいカット。

次は戦闘回ですよ初ですようまく書けますかね？  
まあ、がんばります。

最後に、トチ狂った作者がコードギアスの小説を始めました。  
そっちも宜しく願います。

機体設定 part 2 (前書き)

Wikiまんまww

## 機体設定 part 2

ミステリアス・レイディ（霧纏の淑女） 楯無の第3世代型IS。  
ロシアが設計したIS「モスクワの深い霧」  
の機体データを元に楯無が1人で組み上げたフルスクラッチタイプ  
の機体。

他のISに比べ装甲が少なく、それをカバーするように左右一対で  
浮いている「アクア・クリスタル」というパーツからナノマシンで  
構成された水のヴェールが展開されており、ドレスやマントのよう  
に装着者を包む。

武装は下記以外に高圧水流を発することができる蛇腹剣「ラステ  
イー・ネイル」を搭載している。

ほとんどのパーツにナノマシンで構成した水を使用しているため、  
水を自在に操ることができる。

機体カラーは水色。

クリア・パッション  
清き熱情 ナノマシンで構成された水を霧状にして攻撃対象物へ  
散布し、ナノマシンを発熱させることで水を瞬時に気化させ、その  
衝撃や熱で相手を破壊する戦闘能力。拡散範囲は限られているが、  
非常に有用性が高い。

ネイ  
蒼流旋 特殊ナノマシンによって超高周波振動する水を螺旋状に  
纏ったランス。四門のガトリングガンも装備されている。

ミストルテインの槍 通常時は防御用に装甲表面を覆っているア  
クア・ナノマシンを一点に集中、攻性成形することで強力な攻撃力  
とする一撃必殺の大技でもあり、自らも大怪我を負いかねない諸刃  
の剣。そのエネルギー総量は小型気化爆弾四個分に相当する。

## 機体設定 part 2 (後書き)

一応、次の話に出てくるので載せておきます。

あんま意味ないかも…

## 第10話(前書き)

初の戦闘描写。

うまく書けませんでした。

## 第10話

第3アリーナにて、

二つのISがあつた。

「……………ど、どちらさまでしょうか？」シアンは、素直に疑問を口にする。

「ん？私？おねーさんは、この学園の生徒会長。更識楯無よ、楯無って呼んでね」とウインクする。すると、千冬さんが、閻魔大王も涙目のドスを聞かせた声で、

「更識い…さつさと模擬戦を始める。(私のシアンにウインクなどシオッテ…)」  
アリーナでは、

「ありゃ、怒らせたかな？」

「なんでですかね？(怒ることなんてあるのか。)

「あ、分かってないんだ。(そういうことね)」

「??？」

そうすると、また管制室から威圧感があつた。

「織斑先生が、怖いからそろそろ始めましょう？」楯無さんは冷や汗だらだら流しながら、ランスを呼びだす。

「そうですね？まあいいですよ。（近接武器…ならこっちも）」立ち話も何ですしねと付け足し近接ブレード  
同田貫どしたぬきを呼びだす。

そして、シアンは一気に距離を詰め、連撃を与える。

「っ！（速い…）へえ、随分と速いんだね？」だが、楯無さんは、余裕に捌く。

「それが、取り柄ですから。（くそっ簡単に捌かれる…だったら）」そして、断罪者ジャッジメントを呼びだし、距離を取りズガガガンと適当に4連射する。

「？そんな甘い照準じゃ…」簡単によけられる。しかし、ゲイン、「！？」バスバスバスバス追尾し全弾命中する。

「グウウ」一気にSEを400削られる。

「な！一気に400も…」さすがの楯無さんも焦りが見える。

「なかなかの威力ね…」

「どうも、じゃあもう2発如何ですか？」と2発撃つ。

「まだ、答えてないんだけどなあ」そして、避けるが当然命中する。

「（？何かおかしい）」

そして、当たった楯無さんが水になった。

「なあ！？（み、水になつたあー！？）」

そしていつの間にか蛇腹剣を構え後ろにいた。

「（後ろ！？まず…）っ！…」大型ウイングスラクターを全開にして何とか回避した。

「へえ…おねーさん避けられるとは、思わなかったなあ」

「ぜえ…ぜえ（おいおい、余裕じゃないか…）」

「（だいぶ疲れているわね。）そういえば、ここら辺何だか熱くない？」

「（？）ああ、そう言われればなんとなく…」

「フフツ 清き熱情」  
クリア・パッション

その瞬間ドカーンシアンの回りが爆発した。

「（…！？なにがあつたんだ？）ぬぁ！」

「びっくりした？清き熱情はね、ナノマシンで構成された水を霧状にして攻撃対象物散布して、

ナノマシンを発熱させることで水を瞬時に気化させて、その衝撃や熱で相手を破壊する技なんだよ。」

「ご、ご丁寧にごうも…（SEが残り300を切った。早めに決着をつけなくては…）」

すぐに、アイザイアン・ボーン・ガンを呼びだし、ジュール熱を最大で入力する。

「勝負をつけるかい？（まあ、こっちも追尾弾のおかげで結構危ないんだけど…）」

「ええ、そうしましょう。」

「じゃあ、こっちも本気で行こうかな？（危ないけど、まあ本気じゃないと負けちゃうからね…）」  
そして、アクア・ナノマシンを一点に集中し、攻性成形する。

「（多技かな？）シャレになってませんか？」 「（成功するといけど…）」そうね。」

「行くわよ（ます）」

「ミストルテインの槍！！」

「アイザイアン・ボーン・ガン！！」

両者の渾身の攻撃がぶつかり、ズガアーンと大爆発が起きた。

## 第10話（後書き）

初の戦闘描写。

そして、決着は次に持ち越しという…

どうだったでしょうか？

アドバイス等待着っております。

## 第11話(前書き)

最近、うまく話がまとめられません。もしや、これがスランプってやつか…

とりあえず、見てっして下さい。

## 第11話

第3アリーナの爆発が晴れたのち、  
ISが強制解除され、気絶しているシアンがいた。

ピー

「試合終了。 藍川シアンのシールドエネルギーエンプティイを確  
認 勝者…更識楯無」

「（あ、危なかった。）」楯無さんのSEも残りあと僅かだった。

「（なかなか、強い子ね。…まあ、その前に全力で逃亡しなきゃ！）

「楯無さんは、ISでの戦闘後で疲れているからだに鞭を打ち、全力  
で走りだす。」

何故かというと、後ろから千冬あしゆいさんが追いかけてきたからである。

「更識いいいい！！！！よくも、シアンを！！！！！！」

子供の遊びとかじゃない、千冬さんと楯無さんのガチのリアル鬼ご  
っここが始まった。

気絶している、シアンを放っておいて…

ここからは、作者初の一人称です。

み、皆さんこんばんわ。更識楯無よ。

おねーさんは、今本気ってかいてまじって読むリアル鬼ごっこをしてるわ。

もちろん命がけのね。いや、そこまでじゃないだろ？って思ってるでしょうけど。

鬼は、あの織斑先生よ。きつと地獄の果てまで追いかけてくるわ。

とりあえず今は、生徒会室に隠れてるけど何時見つかるか全然見当がつかないわ。

「いつの間にか後ろに居たりして…いや、さすがにそれは…」ある』  
…へ？」それはないかと言うところで遮られた。

「お、おおお織斑先生…」ひ、冷や汗がとまらないわ…これが、ブリュンヒルデ…恐ろしいわ…

そしたら、天使のような悪魔の笑みを浮かべた織斑先生が、

「なに、私だって人間だ。人間の限度をわきまえている。」

さ、さすがね。織斑先生は、心が寛大だわ。でもなぜかしら？冷汗は止まらないんだけど…

「だから、その限界まで痛めつ…指導してやる…精々あの世で後悔するんだな…フッフ、フハハハ…ゲホゲホ」あ！咽た。

「では、特別指導室まで連行じゃなかった行くぞ。」さつきから、言葉の端節から恨みを感じ取れるんですが…大丈夫なんでしょうか？ああ、神様私は、明日朝日を拝めるのでしょうか？

そして、連れてこられたのは織斑先生の部屋だった。

「入れ。」おそろしく命令口調がぁいますねー。

そして部屋に入るとそこは、魔窟だったわ。おびただしいほどのビール缶の山。これを片付けるのが今回の指導らしい…

2時間後…魔窟は、普通の部屋に戻った。しかし、私のHPはもう0よ。

しかし最後に、織斑先生は私にとどめをさした。

「よし、きれいになったな。じゃあ、指導の続きはまた明日だ。では、今日のところは釈放…じゃなかった帰っていいぞ。」

ええーまだあるんですかぁー　そして私は、この時気付いた。この世界に神なんていない。

ちなみに、シアンは…夜第3アリーナで

「ん？（ああ、そうだ、試合してたんだ。気絶してたってことは、  
負けたのか…）はああ、これじゃあ最高の機体をくれた  
プリンさんに申し訳が立たないよ…」

そして、初めてのIS戦闘で疲れたため、部屋に行つて寝ることに  
した。

とりあえず、1001室に行つた。途中、

「…燃えたよ…燃え尽きたよ…真っ白な灰にな…」と某ボクシング  
マンガの明言をガチで言つてる楯無さんがいた。

「（！？…さ、触らぬ神に祟りなしって奴だな…）」とそーと横を  
通り過ぎ1001号室に着いた。

「（確か相部屋の人って女子なんだよなー）」　こんこん　一応ノ  
ックする。

すると、ガチャリ。

中からは、千冬さんが出てきた。

## 第11話（後書き）

とりあえず、ここまでです。

感想、アドバイス、批判等お待ちしております。

## 第12話(前書き)

よく、分からない物になりましたが、

読んでくださっている方々、よろしくです。

## 第12話

ガチャリ ドアが開くとそこには、千冬さんがいた。

「（…え？何故に千冬さん？）」「  
千冬さんの登場に驚愕するシアン。

「（むう…シアンの奴め…そんなに私と相部屋がいやなのか…？）」「  
千冬さんはすこし、ほんのすこしホントーにすこし涙目だ。

「」「……………」

二人の間に微妙な空気が流れる。

「あ、あの…どうして千冬さんが俺の部屋に？（まさか、部屋間違えたとか？）」「

「あ、ああお前は、私と相部屋なのだ。他の女子では嫌だろうつからな。

（ホントは、シアンに変な虫がつかないようにするためのが…）」「

「ああ、そうだったんですか！確かに気まずいですね…ありがとうございます。」「  
と、にこりと笑う。

「ノノノノま、まあな（ああ、この笑顔を毎日見れるのか…やばいな）」「

「とりあえず、部屋に入れ。」「部屋に促す。

「はい。(待てよ、確か千冬さんは家事が壊滅的に出来ない…まさか部屋の中は、  
ビール缶の山が3つぐらいあるのでは?)」「何かの覚悟を決め、部屋に入った。」

「(あ、あれ?…おかしいぞ。ビール缶の山はおろかほとんどにもないぞ?)」

シアンは、あれ?あれ?ときよろきよろしている。

「(…シアンは何をしているんだ?…まさか…)シアン、お前今ビール缶の山はおろかほとんどにもないぞ?とか、思っただろ?」

シアンはギクツという擬音がとても合っているような動きをした。

「えーお、思ってませんよ。そんなこと、微塵も…(何故、バレタ!?)」

「ほう、そうか。嘘をつくか?この私に。」だんだん、阿修羅が千冬さんの後ろに形成されていく。

「す、すいませんでした…」チロリ(涙×上目遣いのコンボ)チフーユは5万のダメージを受けた。

「(グボアア)…ま、まあいいだろう。(な、なんて威力だ…これは、私だけで独占しなければ…)」  
「独占欲?の強い千冬さん居た。」

「(…?許してくれたかな?)」「千冬さんの心理状況を全く理解して

いないシアンだった。

「そうだ、シアン。ISについて私が直々に教えてやるのか？イタリアで聞いたからと言って

まだ、分からないこともあるだろう？（その間は、二人きり…／＼／）」

普通だったら下心に気付くが、気付かないのがシアンクオリティー。

「ホントですか！？千冬さんに教えて貰えるなんて嬉しいです  
本当にうれしそうな顔をする。」

「つゝゝゝ／＼／＼／＼（ああ、癒される…）じゃあ明日からだな。」

「はい！」

「それでは、荷解きをするか。」

「分かりました。」

そして、荷解きを15分ほどで終え、寝た。

## 第12話（後書き）

無理やり感半端ないですね？

感想等待着っております。

## 第13話(前書き)

今回は、結構短めです。

## 第13話

第3アリーナ…一夏側ピット

シアンたちは、一夏のISの到着を待っていた。

「「「……………（遅くね？）」「」 シアン、一夏、箒は同じことを思っていた。

「なあ、シアン？俺のISいつ来るんだ？」

「知らん。もうチヨイじゃね？（笑）」 最近気付いた。シアンって多重人格じゃね？

「なんだよ（笑）って…」

「お前たちは、何をしとるのだ。緊張感がないぞ！」  
最近、空気だった箒さんが言った。

「「いや、負ける気がしないし…」「二人とも同じことを言った。

「その気は、どこからわいてくるのだ？」

こんな会話をしていたら…

「織斑君、織斑君、織斑くゲホゲホ…」

織斑君と連呼し咽た、山田先生がやってきた。

「山田先生、どうしたんですか？」一夏が聞く。

「あ！きました。織斑君の専用IS。」

「「「やっとかー!」「」」

そして、扉が開くとそこには、白がいた。

「これが、俺の…」そして、ISに近づぐ。

「はい、それが織斑君の専用IS…白式です。」

「白式…」

「織斑、時間がない。フォーマット 初期化と最適化処理は実践でやれ。ファッティング  
やれなければ、負けるだけだ。」

「はい。」

そして、ISを纏いアリーナの方へ向って行った。

一夏の戦闘は省略。この小説の主人公は、あくまでシアンなので…

「次、シア…藍川…オルコットの準備が出来た。行け。」

「はい、千冬さん。じゃあ、行ってきます。」

「行くぞ、リベリオン。」

シアンは紫を纏った。そして、アリーナへ飛び出した。

### 第13話（後書き）

次は、二回目の戦闘描写です。

うまくいくか、不安でしょうがないです。

感想などまっております。

## 第14話(前書き)

戦闘描写は苦手です…

読みづらいと思いますが、おおめにみてください。



「（銃か…じゃあ、こっちは…）」近接ブレード同田貫どうじたぬきを呼び出す。  
「遠距離狙撃型のわたくしに近接武器で挑むとは、笑止ですわ！」  
シアンをスターライトで狙うが、

「ほいほいっと…」シアンは、大型ウイングスラクターを吹かし、  
結構余裕で躲す。

「なっ!?!うまく避けますのね!でも、これで!」とBT兵器を展開する。

そして、BT兵器はシアンを狙う。しかし、またもや余裕で避ける。

「なあ!?!くっ…なんでそんなにうまく避けられますの?」セシリアには、ほとんど余裕がない。

「ん?ああ、千冬さんに弾丸の避け方のコツを教えてもらったんだ。そしたら、すごいな全然当たらないな…」

「い、インチキですわ!」セシリアは、暴走気味だ。

「まあまあ、代表候補生なんだから?このくらいで怒るなっつて。それとも、イギリスの淑女レディは気が短いのかい?」

あからさまな、挑発だが今のセシリアには絶大な効果を発揮する。

「な、なんですつて!もう手加減しませんわ!!」

踊りなさい、わたくしセシリア!!オルコットとブルーティアーズの奏ソルツでる。円舞曲で!!」

そして、スラーライトをシアンに向ける。

「悪いね、<sup>ワルッ</sup>円舞曲は苦手なんで…」セシリアが、スラーライトを打とうとしたら、

シアンは、いつの間にかセシリアの真後ろに居た。

「う、後ろに！？（何時の間に！？まさか、<sup>イグニッションブースト</sup>瞬時加速）」すぐに対応しようとしたが、

「遅い！（くうっこれは結構Gが掛かるな）」

ズバ ドガン セシリアのスターライトは、シアンによって破壊された。

「くっ…」セシリアは、距離を取り再びBT兵器を展開する。

「（うーん、じゃあ…）」<sup>ジャッジメント</sup>「断罪者！」シアンは、<sup>ジャッジメント</sup>断罪者呼び出しBT兵器に適当に4発放つ。

「（？そんな、甘い照準じゃ…）」

BT兵器を動かし、簡単に躲す。だが、グイン ドガガガン 「！？」

「な！？追尾機能！？そんな、技術が…」 「あるんだな、それが…」

シアンは、ズガガンとさらに2発撃つ。

「っ！！」セシリアは避けるが、追尾し被弾する。ドガガン

「ああ…！（エネルギーが、一気に200も！？ばかげた威力ですわ）」

「（はいはい、次々）」次にシアンは、アイザイアン・ボーン・ガン（サーマルガン）のジュール熱を2/3に入力し、撃つ。

バーン ドガン 弾丸が、セシリアに飛んでゆき、ブルーティアーズの装甲が、砕けたところに着弾し、絶対防御が発動する。

「ぐうう…（不味いですわ、後はミサイル型とインターセプターしかありませんのに、それにしても、強いですわね。ホントにISの起動が2回目とは思えませんわ。）」

「（そろそろ、終わらせないと…断罪者と瞬時加速を使ったからな…SEが心もとない…）これで決める！」

再び同田貫（同田貫）を呼び出し瞬時加速（イグニッションブースト）で距離を詰める。

「はあああああ」同田貫（同田貫）を振りかぶる。

そして、ズバ セシリアを斬る。

そこで、セシリアのSEが無くなった。

ピーとブザーが鳴った。

『試合終了。セシリア＝オルコットのシールドエネルギーエンブレ  
イーを確認。』

勝者…藍川シアン』

## 第14話（後書き）

読みづらかったですね。

感想などまっています。

あ、そうだ。

これから、作者に余裕がある際には、他の作者様がやっておられるような事を

このあとがきでやりたいと思いますのでよろしくお願いします。

最後に：紅だったひと様の活動報告で二つ名メーカーというものがあつたので自分もやってみたくなりました。

藍川シアン カオスゲート  
人形

作者の感想

は？意味不明何ですが…

藍川 シアンだと ノイローゼセラピリンズ  
眼球斬鬼

作者の感想

英語の意味わかってるのですか？

ノイローゼの迷宮ですよ。 しかも、漢字怖いですよ。

織斑 千冬

ディバインミラージュ  
幻想封神

作者の感想

呆れてきました。

織斑千冬

アストララルラビリス  
月光の眼

作者の感想

漢字の方はいいと思います。

それにしてもラビリスがお好きなんですね。

私は、あなたの脳内がラビリスだと思っています。

千冬さん

イウィルクラスト  
黒の亡命者

作者の感想

亡命しちゃだめだと思えますし、千冬さん白騎士ですよ。

皆さんも、ひまでしたらやってみてください。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4068x/>

---

IS～反逆の名を冠するIS～

2011年10月21日06時59分発行